

民数記 17 章をお開き下さい。今、日本の教会は揺れております。『教会のカルト化』といった言葉が頻繁に聞かれるようになりました。そのようなカルト化した教会のことを『バイブルカルト』などとも言います。一般的に言うカルトというのは、よく皆さんがすぐに思いつくのはオウム真理教であったり、何かいかわしい財産目当てであったり、また若者の人生を台無しにしてしまい、マインドコントロールといった手法を持って破壊的なカルトというのをイメージされると思うんですが、ところがそれらと全く同じような手法を用いて教会を運営して、そして多くの人たちを巻き込んで、多くの人たちを傷つけて、教会は破れに敗れて崩壊してしまっている。そのようなカルト化した教会が、昨今非常に問題となっております。一般のマスコミのニュースであったり、また週刊誌にも取り上げられるようになりました。そのような教会には必ずと言っていいほど権威主義と、また強権的な指導者がそこに君臨していて、独裁者の如く教会を縛り付け、支配して、そしてマインドコントロールの手法を持って全くカルトと同じようにそこで私腹を肥やすような教祖的な牧師といった人たちが必ずいるわけです。教会員に奉仕を強要したり、献金を強要したりと。そのようなカルト化した教会というのが急増しているというのが今の日本の教会の実態であります。多くのクリスチャンたちが教会につまずいた、傷つけられた。牧師にとんでもない目に遭った。教会の指導者たちに本当に幻滅したと。もう教会生活には疲れ果てたと。嫌気がさしたと。燃え尽きました。バーンアウトしてしまいました、と言うクリスチャンによく出会います。また信仰という名の虐待を受けました。霊的虐待 (spiritual abuse) を受けました、といった声もあります。「でもそのようなカルト化した教会というのは、一部の怪しい単立教会の話ではないですかと。」そのような一部の単立教会のような小さなグループがそのようなカルト化に走っていくのではないかという指摘もあるんですけども。しかし今私が冒頭に言いましたように、今日本の教会が揺れていると言いました。名だたる教団も、皆さんのよく知っている教団教派、ビッグネームのメガチャーチのような教会も、またカルト化しているということを知って頂きたいと思います。で、それは聖霊派だとか、福音派だとか、またリベラル派といったグループを問わずにこのカルト化の流れというものが、勢いというものが、見受けられます。金銭スキャンダルも、性的スキャンダルも横行しています。聖書から完全に外れてしまった逸脱した教えがそこで説かれております。その結果教会員は傷つけられ、縛られ、そしてついには崩壊していきます。教会も分裂分派、そして消滅していくわけです。そのような教会に集っていた人たちの多くは、最早もう私は教会には行けませんと。私はもう教会アレルギーを持ってしまいましたと。または牧師アレルギーにかかっています。教会という、牧師という呼び名を聞くだけで、もうアレルギー反応、拒否反応が起こってしまう、という人たちも大勢いるわけです。

ただ私たちは今この民数記を通して特に教会の必要性というもの、また必然性というものを学んできているわけです。なぜならば民数記に出てくるイスラエルの民は、荒野の民は、教会の型であるということを学んできました。事実この荒野の集いを、荒野の集いのことを、新約聖書ではギリシャ語で“エクレシア”と表現しています。“エクレシア”というのが、まさに「教会」という言葉の、ギリシャ語の原語であります。ですから、この民数記を学ぶ時に、ここに登場するイスラエルの民を、この集団を学ぶ時に、私たちはまさに教会としての集まり。そしてその道のり、歩みというものを重ね合わせて見ることが出来ます。イスラエルの 12 部族は皆必ずどこかの部族に属していました。それと同じように私たちクリスチャンも必ずどこかの地域教会に属するわけです。イスラエルの集いにおいて“どこの部族にも属していない”という人はいなかったわけです。クリスチャンの中で「どこの教会にも私は属していません。私はフリー

です。」と言う人は、本来は、存在してはいけません。神様は全員が1つの群れに集うように、地域教会に必ず繋がるようにと、この**民数記**を通して教会のあり方、教会の役割、教会の存在意義といったことを正しく教えてくれます。新約聖書においても特に**コリント人への手紙第一**において、教会はキリストの体にたとえられております。体の器官が私たち1人ひとりであります。それぞれの器官には機能が与えられていて、互いに欠けているところ、弱っているところ、自分の苦手な分野も、弱点も、それぞれの器官が補いあって1つの体を建て上げていく、形成していく。それが教会という場所であります。ですから「私は教会には繋がりません。私は一匹狼です。」と言う人は、まさに体の器官としてはズタズタに切り裂かれたバラバラ死体の一部のような存在で、そこには命がありませんし、また本来は繋がって機能するべきところが繋がっていないので機能も出来ないわけです。そしてお互いに支え合う、仕え合う、愛し合うといった素晴らしい体の機能を失っているわけです。ですから多くの方は「教会につまずきました。牧師に傷つけられました。この教会の問題でもう私はとても二度と教会には行けません。」そういう人たちが実に大勢おります。ここに集まっている皆さんは勿論例外ではあります。でも実に多くの方が、特に恐らく（今このメッセージはインターネットで聴けるようになります。）インターネットで聴く人の中には、おそらくその多くは、「もう教会には私は行けません。教会の必要性が分かりません。教会なんか面倒です。」と。そういう人たちもおられるかもしれません。

ここで**ヘブル 10 : 25** というところを参照して見たいと思います。『ある人々のように、いっしょに集まることをやめたりしないで、かえって励まし合い、かの日が近づいているのを見て、ますますそうしようではありませんか。』ある人々のように、いっしょに集まることをやめたりしないで、かえって励まし合い、かの日が近づいているのを見て（かの日というのは私たちの花婿イエス・キリストが花嫁である教会、私たちをお迎えに来てくださるその日を夢見て期待して）、ますます集まろうではないかと。ですから教会に集まる事は、これは必要なことで必然的なことなんです。「私は教会に集まらない、行きたくない、その必要性が分からない。」と言う人たちは、聖書を全く知らない人たちであり、特にこの**民数記**を学んでもいない人たちだと思います。彼らの気持ちは分からないわけではありません。私もかつてそういう思いになったこともあります。でも、その時の皆さんの、私の心にあったのは、やはり教会に集わないのは、言い訳を持って、言い逃れを持って避けていたんです。人のことは良く目につきます。指をさすのは簡単です。粗探しも簡単です。でも100%自分だけが被害者とも言えない部分があります。どんな理由があるにせよ、教会に行かなくていいというのは、聖書的な考えではありませんし、また教会の必要性が分からないのは、私に分かろうとしないからだ。ですから教会に行くと、もう面倒だから、人間関係も煩わしいから、また新たなトラブルには巻き込まれたくないから、だから私はもう教会には行きませんと。傷つけられた人たちは特に被害者意識が強くて、人を赦すということに困難を感じます。でも聖書では「赦しなさい。」と、イエス・キリストが私たちを赦して下さったように、私たちも互いに赦し合いなさいと言われております。「その御言葉は頭で分かっています。赦したいのは山々ですが、赦すのは簡単なことではありません。ですから、教会に行くと赦さなければいけないので辛いんです、面倒なんです。問題と向き合っていかなければいけない。問題を直視しなきゃいけない。これは耐えられない。感情的にも苦しいので、教会にはもう行けない。」と言う人たちが大勢いますが、彼らの気持ちはよく分かるんですが、しかしこの**民数記**を通して私たちは、教会の必要性、必然性というものを通して、たとえどんな理由があるにせよ私たちは必ずどこかの教会に属すべきであり、そしてその教会において私たちはキリストの体の一部としての機能を活かすことも出来ますし、そしてそこでしか味わえない素晴らしい祝福があるわけです。そしてその中にこそ神の栄光が満ちているわけです。この荒野の民の中心には常に神の栄光が満ちていました。この神の栄光に近づきたければ、私たちはどこかの教会に属さなければいけませんし、神様はあなたに必ず属すべき教会を与えています。「でも私の地域には、私の町には、私の村には、教会は1つもないんですと。」必ず

どこかにあります。市をまたいでもいいと思います。実際にこの教会にも県外から来る人もいますし、また車で3時間もかけて通って来られる方もいます。必ず神様があなたに備えた教会があります。「でも、どうやったらそのような自分が繋がるべき教会を見つけることができるのだろうか。教会に繋がるのであれば、教会のメンバーに、会員になるならば、私は健全な、健康な教会に行きたい。そういうところの教会員になりたい。どうやったらその教会が聖書的で、その教会の牧師の教えていることが正しいのか。そこが正当なキリスト教会なのか。私には分かりません。どうやって見分けたいのでしょうか。何か見分ける基準だとか、方法だとか、そのような判断基準、ものさしといったものはないのでしょうか。」

それに対する答えが、今日のテキストの**民数記 17 章**であります。この **17 章**に入る前に前回までの内容を思い起こして下さい。**17 章**の背景にあった事件が **16 章**に記録されていました。イスラエルの民、300 万人もの民のリーダーは、モーセとアロンでありました。そのモーセとアロンの 2 人に対して、クーデターを起こした連中がいました。首謀者の名をコラと言いました。コラというのはモーセとアロンの従弟にあたります。で、このコラはダタンとアビラムとオンといった仲間も抱き込んで、そしてさらには 250 人も名だたる人たち、権威のある人たち、指導的な立場にある人たち、彼らもまた抱き込み、巻き込んで、そしてモーセとアロンのリーダーシップに、その権威にチャレンジしました。そこには、自分たちには与えられていない祭司職というものを求めたんです。「なぜアロンに与えられていて、自分の従弟に与えられていて、俺たちにはそれが与えられないのか。」それが聖書で言う妬^{ねた}みの罪であります。「なぜあの人にはあって、私にはないのか。なぜアイツなのか。俺でなくて、私でなくて。」と、そのような妬みも、また不平不満、つぶやき、このような反逆心、プライドといった罪が働いて、このモーセとアロンの権威に対してチャレンジをしたわけです。

その結果どうなったかということも **16 章**で詳しく見ました。コラとか、ダタン、アビラム、オンといったリーダーとその家族は皆、地に飲まれました。神が立てた権威に対してこの人たちは反逆して、そして結果的には神の裁きに遭いました。彼らが巻き込んだ、抱き込んだ 250 名もの名だたる者たちも、神によって火で焼かれて処刑されました。必ず神の立てたリーダーシップに反抗する者たちは、サシでは対抗しません。私流に言えば、タイマンは張らないんです。タイマンではなくて、必ず神様の権威に対して、神の立てたリーダーに対して反抗する者たちは、自分 1 人では対抗出来ませんから多くの人たちを抱き込んで、そして多数の力を持ってチャレンジしてくるわけです。他にもそのような彼らの反逆に扇動されてしまった 14,700 人もの人たちも神の罰によって、神罰という言葉が使われていますが、恐らくは何らかの疫病のようなもので打たれて死んだとあります。ですからコラ、ダタン、アビラム、オンのそれぞれの家族は地に飲まれ、そして 250 名もの名だたる者たちも火で焼かれ、そしてそれに同調してしまった、扇動されてしまった、影響を受けた反逆心に満ちた、不平不満の言葉を漏らしていた 14,700 人もの人たちもまた神によって裁かれてしまったという、それが前回までの内容でありました。

この **17 章**に入る前に、今お話した **16 章**の内容が背景にあるわけです。モーセとアロンの権威にチャレンジするようなカルト的な教え。何か新しい働きを始めようとする。リーダーに反抗して、そして神様の権威を無視して、自分たちのやりたいこと、そして自分たちの思うままに好き勝手にやりたい。そのような御言葉からも逸脱し、神の権威も無視して、間違った教えをし、間違った働きをする。そのようなカルト的な働きから、妬みやプライドや不平不満の罪から教会を守るためには、また私たちも守られるためには、一体どうしたらいいのか。それが教会を見分ける基準、測り竿となってきます。その測り竿というのが、この **17 章**の中に杖として描かれています。しばらく **1~11 節**までを読み進めていきます。

『¹主はモーセに告げて仰せられた。²「イスラエル人に告げて、彼らから、杖を（これが神の基準、測り竿となっていきます。）、父の家ごとに一本ずつ、彼らの父祖の家のすべての族長から十二本の杖を、取れ。その杖におのおのの名を書きしるさなければならない。（イスラエルの民は 12 部族に分かれていまし

た。全体では 300 万人です。それぞれの 12 部族には族長がいて、その族長がリーダーとして杖を取りました。その杖には彼らの名前も刻まれました。3 節に) ³レビの杖には (レビというのがその 12 部族の 1 つの部族。アロンとモーセの部族で、そこには) アロンの名を書かなければならない。彼らの父祖の家のかしらにそれぞれ一本の杖とするから。⁴あなたはそれらを、会見の天幕の中のわたしがそこであなたがたに会うあかしの箱の前に置け。(あかしの箱というのは、あかしの板と呼ばれる、あのモーセの有名な十戒、10 の言葉が刻まれた 2 枚の石板のことを言います。これが神の箱に、これをあかしの箱と言います。それが収められていたんです。その箱は幕屋の中の最も聖なる場所、聖所の中の聖所と呼ばれる至聖所の中に置かれていました。そこにそれぞれの 12 部族の代表の権威を象徴する杖を置きなさいと。そして 5 節に) ⁵わたしが選ぶ人の杖は芽を出す (杖というのは木から切り取ったものであります。切り取ってしまえば当然そこには命がないはずで。死んだ木です。ところが、神の選んだ人の杖からは芽が出てくると言うんです。)。こうしてイスラエル人があなたがたに向かってつぶやく不平をわたし自身が静めよう。」⁶モーセがイスラエル人にこのように告げたので、彼らの族長たちはみな、父祖の家ごとに、族長ひとりに一本ずつの杖、十二本を彼に渡した。アロンの杖も彼らの杖の中にあった。

⁷モーセはそれらの杖を、あかしの天幕の中の主の前に置いた。(この天幕というのが先ほども少し触れましたけれども幕屋と呼ばれるもので、幕屋というのはテントですから移動式の礼拝施設ということです。ポータブル・ワーシップ・センターというものです。この中に神の臨在が満ちるということで、その象徴として、神の臨在の象徴としてあかしの箱というものがあつたんです。で、8 節に) ⁸その翌日、モーセはあかしの天幕にはいって行った。すると見よ、レビの家のためのアロンの杖が芽をふき、つぼみを出し、花をつけ、アーモンドの実を結んでいた。⁹モーセがその杖をみな、主の前から、すべてのイスラエル人のところに持って来たので、彼らは見分けて、おのおの自分の杖を取った。¹⁰主はモーセに言われた。「アロンの杖をあかしの箱の前に戻して、逆らう者どもへの戒めのため、しるしとせよ。彼らのわたしに対する不平を全くなくして、彼らが死ぬことのないように。」¹¹モーセはそうした。主が命じられたとおりにした。』神様は、誰が神によって立てられた真の権威を持つリーダーであるのか、そのことをハッキリさせるためにそれぞれの 12 部族の族長たちの杖を持って来させて、そしてそのうちの 1 つにはアロンの名前も刻まれた杖を置いて、神様が、どの杖が権威を持った神に選ばれたリーダーの杖なのかということ誰にでも分かる形で、明らかにこれは違うという形で、白黒ハッキリさせるということをなさいました。そのことによってもうつぶやき、不平不満、妬みやプライドといった罪から権威に対してチャレンジするということがないようにと。これ以上ないという証拠を示そうと、不思議なことをなさいました。お読みしたようにアロンの杖だけが芽をふき、そしてつぼみを出し、花をつけ、アーモンドの実を結びました。アーモンドの花というのは、白い花でピンクっぽい色もしていてちょうど桜の花のようなものでありまして、春のシーズンに咲いて、そして冬の終止符を打つような非常に象徴的な、印象的な花として中東のイスラエルでは捉えられてきました。“アーモンド”というヘブル語は、実際に「シャケドゥ」"xhaqed"と言って、「シャケドゥ」の語源は「シャカドゥ」と言って、それは「目覚める」という意味の語源から来た花、木であります。「目覚める」とか「警告する」。長い冬を、その間は枯れた状態、死んだ状態からこの「目覚める」という「シャケドゥ」というアーモンドが芽を出し、つぼみを出し、花をつけて、実を結ぶことによって、復活の命を象徴し、まさにそのような死から命に移るといふ甦り、復活も象徴するような植物であります。このアロンの杖だけが芽をふいて、つぼみをつけて、花を咲かせ、アーモンドの実を結んだわけですから、これはもう誰が見ても明らかに神様が特別にこの杖を扱っているんだと。桜の木なんかも枝を切って私の実家の静岡県の三島からも河津桜を毎年春には、早春には送ってくれて、それにも確かに芽がついていて、花が咲きますけれども、しかしそこからさくらんぼは取れません。やはり切ってしまうとそれなりに限界があります。でも、このアロンの杖の場合は、ただ芽をふき、つぼみをつけただけではなく、また花を咲

かせただけではなく、アーモンドの実まで出来てしまった。これは普通ではありえない。誰が見てもこれは神の力が注がれているんだと。この杖を持つ者こそ神に選ばれた権威者である、リーダーであるということは明らかであります。で、この杖という言葉は、ヘブル語では「マッテエ」"matteh"と言うんですけども、12部族のその“族”、これもまた「マッテエ」と言うヘブル語です。また、「枝」"branch"これも「マッテエ」というヘブル語が使われています。枝から取られたのが杖ですから当たり前ですが、その枝分かれした部族のことも「マッテエ」と言うんです。ですからこの杖というのはまさに12部族を表す同じヘブル語「マッテエ」が使われています。「杖」＝「族」というふうにも見ることが出来ます。神に選ばれた族の中の族長、それがアロン。彼は大祭司として神様が選ばれた、認められた、神に力を与えられた特別な神の器であるということがここで証明されたわけです。

そしてここで皆さんに考えて頂きたいのは、この「杖」というものが象徴するものを、それは何であるのかということです。先ほどは、アーモンドというのは冬が終わって春の到来を告げる、死から命に移っていく復活の象徴でもあると言いましたが、他にも「杖」というのは素晴らしいその究極的な象徴の意味というものが聖書では教えてくれてあるわけですが、**イザヤ 11章**を見て頂くとその杖の究極的な象徴の意味というものが描かれております。**イザヤ 11：1～5**までをお開き頂きたいと思います。

『**1 エッサイの根株から新芽が生え、その根から若枝が出て実を結ぶ。**(エッサイというのは、有名なダビデ王のお父さんです。「新芽」だとか、「若枝」という言葉があります。これはメシヤの肩書き、称号、タイトルのことであります。イエス・キリストのことを指します。イエス・キリストはダビデの子と呼ばれます。イエス・キリストの子孫がダビデ、そしてエッサイということで、「エッサイの根株から新芽が生え、その根から若枝が出て実を結ぶと。」ここで言われている新芽とか若枝がイエス・キリストのことを指しております。ですからこの**民数記 17章**で用いられている杖も、イエス・キリストの象徴というふうに見ることが出来ます。その後もしばらく読み進めています。**2節**以降です。) **2**その上に、主の霊がとどまる。それは知恵と悟りの霊、はかりごとと能力の霊、主を知る知識と主を恐れる霊である。**3**この方は主を恐れることを喜び、その目の見るところによってさばかず、その耳の聞くところによって判決を下さず、**4**正義をもって寄るべのない者をさばき、公正をもって国の貧しい者のために判決を下し、口のむちで国を打ち、くちびるの息で悪者を殺す。**5**正義はその腰の帯となり、真実はその胸の帯となる。』エッサイの根株から出た新芽。その根から出た若枝。それは実を結ぶ若枝であります。この若枝には主の霊が注がれていて、そしてその者は、正しい裁きを行う者であると。これがイエス・キリストのことです。イエスは王の王、主の主であって、私たちの支配者であります。そしてイエス・キリストだけが正しい裁きをつけることが出来ます。しかしこのイエス・キリストを二千年前、ユダヤ教の指導者たちは、宗教家たちは、拒否したんです。イエス・キリストの権威を認めずに、自分たちの権威を、その役得・沽券やくとく・こけんというものを守るために、イエス・キリストが邪魔者となったので、二千年前のユダヤ教の指導者たちは、イエスを抹殺しようと。神の権威を退けようと働きかけて、究極的には妬みからイエス・キリストを十字架に追いやってみました。しかし十字架によってメシヤが、イエス・キリストが死なれるということは、すべての人の罪のために罪のない方が身代わりとなって死ぬという事は、旧約聖書の中にも預言されておりました。**イザヤ 53章**などは、その苦しみを受けられるメシヤの預言として名高いところで、その**イザヤ 53章**を読むとイエス・キリストがどのような苦しい目に遭って、そして私たち罪人のためにその罪の代価を支払う贖いの死を十字架で遂げたんだということが、そこに見て取ることが出来ます。そしてイエスは十字架で死んで、墓に葬られました。興味深いことにその墓が**民数記 17章**で見ているあかしの天幕のようなところであります。その墓にイエス・キリストの遺体が葬られました。でもその墓の中でイエス・キリストは甦ったんです。アロンの杖もその至聖所の中に置かれました。あかしの箱の前に置かれたんです。イエスの葬られた墓がどうして至聖所だと分かるんですかと。それは神でもあるイエス・キリストがそこに入られたので、

そこを至聖所と呼んでもふさわしいと思いますが、その時のイエスは死んでいたわけです。しかしそこにはイエスの打たれた傷の血の跡が残りました。その血の跡というのが7カ所あったと、これも前にお話ししました。至聖所に大祭司が入る時には、必ず生贄の血を携えて、決まった日に1年に1回だけ入ることが許されて、その時にはイスラエルの民の全体の罪を贖う、その目的で最も聖なる所に入りますが、その際に生贄の血を7度、その至聖所の中にあるあかしの箱に、契約の箱に振りかけます。その7カ所が、イエス・キリストの受けられた打ち傷の7カ所でもあります。ですからイエスの葬られた墓には、まさに7箇所の血の跡があって、そしてイエスの墓の頭の方と、そして足の方には、御使いが座りました。これもあかしの箱のフタの上には、ケルビムと呼ばれる御使いが座しているように、まさにイエスの葬られた墓は至聖所の中のあかしの箱を象徴するような所であったと、これは前にもお話ししました。そこでイエスはまさにアロンの杖のように、死んでいた木が芽をふき、そして花を咲かせて、実を結んでいくわけです。3日目にイエスは甦って、多くの人たちはイエスを信じ、イエスはその意味においても多くの実を結んでいきました。ここでイエス・キリストだけが死から甦ったお方で、イエスキリストだけが王の王、主の主、究極のメシヤである。イエス・キリストだけが唯一の神である。「でも、世間には、この世界にはたくさん神々がいるじゃないですかと。どうしてイエス・キリストだけが唯一の救い主だとか、唯一の真の神だとか、あなたは主張出来るんでしょうか。断言出来るんでしょうか。」と、いま私の話していることにチャレンジする人もいるかもしれません。しかし私たちが、そのイエスがどうして権威のある者か。これもアロンの杖と同じように、イエス・キリストだけが死から復活されたお方だということを知れば、その権威を認めざるを得なくなると思います。

マタイ 12:38~41 にやはりイエス・キリストの権威について、イエスのメシヤ性についてチャレンジする者たちがいました。『³⁸そのとき、律法学者、パリサイ人たちのうちのある者がイエスに答えて言った。(この律法学者、パリサイ人というのがユダヤ教の指導者、当局者の者たちです。)**「先生。私たちは、あなたからしるしを見せていただきたいのです。(しるしというのは、イエスに対してその権威の根拠というものを、その証拠というものを求めて欲しいと。あなたがメシヤとして教え、活動しているその根拠は一体どこにあるのか。その権威を、そのしるしを私たちに求めて欲しいと。それさえ分かれば私たちはあなたに聞き従うからという質問だったわけですが、39節に)」**³⁹しかし、イエスは答えて言われた。**「悪い、姦淫の時代はしるしを求めています。だが預言者ヨナのしるしのほかに、しるしは与えられません。**⁴⁰**ヨナは三日三晩大魚の腹の中にいましたが、同様に、人の子も三日三晩、地の中にいるからです。(イエスのメシヤとしての権威は、そのサイン・しるしは、ヨナのしるしを持って説明されているわけです。ヨナというのは旧約聖書に登場する有名な預言者で、ヨナ書というところがありますから、そこを読んで頂くと詳しくこの人物について知ることが出来ます。ヨナは神様の命令に反して自分勝手な旅に出るわけですが、しかし結局は神様の命令通りに彼は宣教者として外国で神の福音を語るんです。その時にヨナは神様に逆らった故に嵐に遭って、そして海に投げ入れられて大魚に飲まれてしまいます。大魚の腹のなかで三日三晩まるで死人となって、もう誰もがヨナはもう死んだんだと。3日ももう上がってこないところ、3日目にヨナはその大魚の腹の中から吐き出されて岸边に打ち上げられました。人々は驚いたんです。ヨナはもう死んだと思っていたと。3日も行方不明だったと。まさにヨナは死から甦ったんだと。そのような驚きの目を持って人々はヨナを迎えました。この時にヨナはもう悔い改めて神様の指示通りに、召し通りに従って、そしてヨナの出身国であるイスラエルにとってみれば敵国であるアッシリアのニネベというところで救いのメッセージを、悔い改めのメッセージを語り続けたわけですが、その時に40日間にわたって彼は悔い改めのメッセージを語りました。イエス・キリストも復活されてから40日間地上に現れて神の福音を宣べ伝えました。そのヨナの語った権威というのは、死から甦ったという権威です。死から甦った者の言葉は、これは権威があるわけです。ですからニネベの町中の人たちが皆悔い改めて、**

真の神を信じて改心しました。そのように神に選ばれた真の権威を持つメッセンジャーのしるしというのは、まさにこの復活のしるしであります。ヨナのしるしというのは、イエスが三日三晩墓の中にいて、そこから甦ってくる。その復活を持ってイエスには権威があるんだと。仏教のお釈迦さんとか、またイスラム教のマホメットが、また他にも儒教の孔子だとか、聖人と呼ばれる偉大な人物は沢山います。偉大な宗教指導者たちも、教祖たちも大勢いますが、彼らのすべては皆死にました。そして彼らのすべては墓に葬られて、そこで朽ちていきました。誰 1 人としてそこから甦った者はいません。イエス・キリストだけが甦りました。) ⁴¹ ニネベの人々が、さばきのときに、今の時代の人々とともに立って、この人々を罪に定めます。なぜなら、ニネベの人々はヨナの説教で悔い改めたからです。しかし、見なさい。ここにヨナよりもまさった者がいるのです。』

他にもヨハネの福音書 2 : 18~22 に、イエス・キリストの権威にチャレンジした人たちに対するイエスの応答が記録されています。『¹⁸ そこで、ユダヤ人たちが答えて言った。「あなたがこのようなことをするからには、どんなしるしを私たちにを見せてくれるのですか。」 ¹⁹ イエスは彼らに答えて言われた。「この神殿をこわしてみなさい。わたしは、三日でそれを建てよう。」 ²⁰ そこで、ユダヤ人たちは言った。「この神殿は建てるのに四十六年かかりました。あなたはそれを、三日で建てるのですか。」 ²¹ しかし、イエスはご自分のからだの神殿のことを言われたのである。 ²² それで、イエスが死人の中からよみがえられたとき、弟子たちは、イエスがこのように言われたことを思い起こして、聖書とイエスが言われたことばとを信じた。』ここでもイエスのご自身の権威というものを復活によって証明しようとなさっております。で、事実イエスは死から甦りました。イエスが死から甦ったので、私はイエスに自分自身の人生を捧げ、委ねるといふ決心ができました。自分自身をイエスに捧げるといふのは、これは勇気のいることです。すべてをイエスにお任せする、明け渡す、”commit”するというのは、これは大変勇気のいることであります。本当にそれだけ信じるに値するだろうか。それだけすべてのものを、自分の命までも預けるに値する信頼出来る存在なのか。多くの人々が迷って、なかなか信じるという決心がもてないでいるわけですが、しかしイエスは「このしるしを持って私の権威を知りなさい。認めなさいと。私は死から甦ったのだと。」もしその人が本当に真理を語っているかどうか知りたければ、またその人の言うことに耳を傾けて、信頼して、自分の人生を任せていいかどうか、信じるに値するかどうか知りたければ、是非神の与えられている権威というものをまずは見分けるように働きかけて頂きたいと思えます。

ヨハネの福音書 2 章を開いているようであれば、10 章のところにも目を留めて頂きたいと思えます。ヨハネ 10 : 8 イエス・キリストの言葉です。『⁸ わたしの前に来た者はみな、盗人で強盗です。羊は彼らの言うことを聞かなかったのです。 ¹⁰ 盗人が来るのは、ただ盗んだり、殺したり、滅ぼしたりするだけのためです。わたしが来たのは、羊がいのちを得、またそれを豊かに持つためです。』「わたしの前に来た者はみな」と 8 節にあります。所謂メシヤを自称する人たち、「我こそは神である。」とか、「我こそは救い主である。」と、そのように自称する人たちは皆、盗人であり、強盗であると。彼らは盗んだり、殺したり、滅ぼしたりするだけの者たちであると。その一方でイエス・キリストは「羊が (羊というのは、私たち人間のことを指します。私たちが) いのちを得て、またそれを豊かに持つために来られたお方です。イエスは死んでもなくなる甦りの命をお持ちの方ですから、その命を持っている方は私たちにも同じ永遠の命を与えることの出来る力がある、権威があるというお方であります。「イエス・キリストの復活は、これはクリスチャンたちが勝手に想像して都合の良いように作り出した事実に基づかない空想話、神話じゃないでしょうか。」と、多くの人たちもなかなか非科学的なことには合点がいかないと。「とてもじゃないけれども私の理性ではそんな死から甦るなんていうことは受け入れ難い。」と言う懐疑主義者の人たちも大勢いるわけですが。しかしアロンの杖が誰の目にも明らかなように、これは死んでいた木と全然違うんだと。そのイエスの復活のことも実は誰が見ても明らかな事実であります。歴史上イエス・キリストが存在し、

死んで、甦ったという事は、これは歴史上の事実であります。空想話とか、人が作り上げた神話ではありません。ですから本当に真剣にイエス・キリストが死から甦って、そして今も生きておられるということを知りたい。誠実にそのことを追求して学んでいきたい。という姿勢があるならば、必ず 100%断言しますが、イエス・キリストの復活は否定出来ません。二千年間誰もこのことについて、「イエスは甦えられなかった。それは、ねじ曲げられた、捏造された空想話、神話だった。」というふうにイエスの復活を否定できた者たちは 1 人もいません。逆に否定しようと思って一生懸命キリストの復活のあら探しをしていた人たちは、ミイラ取りがミイラになるようにして、真剣に学んだ人たちは皆、クリスチャンになっていきました。ですから懐疑主義者でも、甦りなんか信じられないという人たちでも、真剣にこのイエス・キリストの復活と向き合うならば、必ず信仰に至っていきます。それでも信じられないという人は、真剣には求めているんです。やっぱりどちらかという信じられないのではなくて、信じたくないんです。その事実を知ってしまうと自分の人生を開け渡さなければいけない。自分が主でいられない。イエスが主となって、自分は主ではいられない。もはや自分の思う通りには生きられなくなってしまう。だからこれ以上の追求はせずに、ある程度のところで止めてしまって、そして何らかの理由をつけながら、文句をつけながら、「復活などこれはおとぎ話だ。」として話を片付けてしまうんですが。是非そのような探求を私たちは多くの人たちにもチャレンジして、「是非イエス・キリストの復活をあなたが信じる事が出来るように祈りますけれども、あなた自身もまたそのことを真剣に探し求めて下さい。その事実を追求してみてください。そうすれば必ずそれは否定出来ない、誰が見ても明らかな歴史上の事実であると、その結論に至るはずですよ。」このように皆さんもチャレンジして頂きたいと思います。リー・ストロベルという人が書いた『ナザレのイエスは神の子か』といった本ですとか、そういった本にもイエス・キリストの復活が史実であるということを証明しています。そのようなものを読めば必ず信じる事が出来ます。それを読んでも信じられないという人は、ただ信じたくないだけです。ですから信じられないという人は、必ず誠実に真剣に本気で学ぶならば、これは認めざるを得ない、誰が見てもこれは史実です、事実ですというところに至っていきますので、是非そういうチャレンジをして頂きたいと思います。復活がイエス・キリストを信じる根拠です。復活にイエスの権威が表されています。だから私たちは皆、イエスに人生を明け渡す事が出来ます。平気でイエスに人生を丸投げ出来るんです。「そんな事は怖くて出来ませんと。」でもイエスにはそれだけの信頼するに値する力が、権威があるということを私たちは復活という事実をもって認めているわけです。

そして復活後イエス・キリストは弟子たちにご自身の権威を分け与えられました。そのことが**マタイの福音書 28 : 18~20** にあります。『¹⁸ イエスは近づいて来て、彼らにこう言われた。(復活後のイエス・キリストが弟子たちに言われた。)¹⁹「わたしには天においても、地においても、いっさいの権威が与えられています。(イエス・キリストこそが究極の権威者です。そしてその権威者が弟子たちに権威を分け与えられて重要な重大な命令を下します。)²⁰それゆえ、あなたがたは行って、あらゆる国の人々を弟子とせよ。そして、父、子、聖霊の御名によってバプテスマを授け、²⁰ また、わたしがあなたがたに命じておいたすべてのことを守るように、彼らを教えなさい。見よ。わたしは、世の終わりまで、いつも、あなたがたとともにいます。』これが有名な大宣教命令というものです。クリスチャンは全世界に出て行って福音を宣べ伝えます。全世界といっても海外宣教の話ではありません。それも含めてですけれども、私たちの世界は、家でもあり、近所でもあり、職場でもあり、日本国内もまた宣教地であります。ですからそのようにクリスチャンは、イエス・キリストから権威を分け与えられて、まるでそのアロンの杖を与えられた者として、神のメッセージを語る器として用いられていきます。

そのイエス・キリストの十二使徒ではありませんが、十二使徒と肩を並べる最大の人、スーパークリスチャンと呼ばれる人がいます。その人の名前はパウロと言います。そのパウロの言葉にも皆さん注目して

頂きたいと思います。第一コリント 11:1『私がキリストを見ならっているように、あなたがたも私を見ならってください。』凄い言葉です。多くのクリスチャンは「私の事は見ないで下さい。イエス・キリストだけ見て下さい。」と、そういう事はよく耳にしますが、聖書的な発言ではありません。私たちクリスチャンは「私を見て下さい。私のうちに住むイエス・キリストを見て下さい。私に見習って下さい。」と言えなくてはなりません。それがちょっと言いづらいので、よく私たちは「私を見ないで下さい。神様だけ見て下さい。」と言いますが、それは言い訳です。そういうことを言うのはいけません。むしろ私たちは自分のうちに住むイエス・キリストを見て欲しいと。そして普段自分がイエス・キリストとともに歩み、イエス・キリストと交わりを持っているその姿を見て欲しいと。それがすべてのクリスチャンが言うべきことであり、また取るべき態度であります。このようにパウロも自分には権威が与えられているということを自覚していました。私たちもイエス・キリストの弟子としてパウロと同じように、イエス・キリストの弟子たちと同じように、イエスという杖を頂いております。その杖は、芽をふき、そして花を咲かせ、実を結ぶという、誰が見ても分かる、これ以上ないという証拠となる杖となるわけです。それは死から甦るというものです。死んでいたものが生きたものとなる。これ以上衝撃的な、劇的な変化というものはありません。

勿論イエスキリストの復活は、私たちクリスチャン皆、信じていますが、ただここで問題となるのは、その神の与えた権威。イエスには与えられている、これは間違いなく容易に信じる事が出来ます。でも、神から権威を与えられていると自称している、主張しているあの牧師、あの教会のリーダーたち。あの人たちはちょっと眉唾ものだと。彼らは確かに「神から油を注がれた器である。」と自身が主張しています。大勢の人もそのように認めています。でもちょっと怪しい。その権威は真のものか、本当に神様から来ているものかどうか、なかなか見分けがつかない。それが冒頭でお話しした『カルト化した教会』などがありますから、それを見分けるためにはどうしても、この杖というものの、神の権威というものが、神聖なものかどうか、正しいかどうか、神から来ているものかどうかを見分けなくてはなりません。

で、その見分ける方法が、この民数記 17 章にある、「その杖には芽がふいているだろうか。その杖には花が咲いているだろうか。その杖には実がなっているだろうか。」私たちはその実によってその権威を、神から来ているものかどうかを見分けるということが問われています。イエス・キリストと同じように死から甦るといふ、そこには復活の命が満ち溢れています。必ずそこには、実が見られるはずなんです。

「私たちが本当にその人から教えを受けるべきだろうか。本当にその人に信頼すべきだろうか。本当にその人から弟子訓練を受けるべきだろうか。本当にその教会に私たちは繋がるべきだろうか。そこは健全な教会か、カルト化した教会か、バイブルカルトか、どうやったら見分けがつくのか。イエス・キリストの権威は信じられるけれども、彼らの権威は本当に信頼に値するものだろうか。」と、そのような疑問を持つのは決して悪いことではありません。マタイの福音書 7:15~20 にイエス・キリストの言葉が記録されています。『¹⁵にせ預言者たちに気をつけなさい。彼らは羊のなりをしてやって来るが、うちは食欲な狼です。(日本語でも「羊の皮を被った狼」などと言いますが、その言葉はここから採られています。女性を食い物にするようないやらしい男のことを言ってるのではなくて、これは偽預言者・偽牧師・偽宣教師といった人たちのことを指しています。羊の皮を被っている。まるでクリスチャンのように見える。まるで敬虔な信仰深いクリスチャンに見えるけれども、その内は狼であると。)¹⁶あなたがたは、実によって彼らを見分けることができます。(アーモンドの実をつけたアロンの杖も全員が見分けたと民数記 17 章に書いてありました。)ぶどうは、いばからは取れないし、いちじくは、あざみから取れるわけがないでしょう。¹⁷同様に、良い木はみな良い実を結ぶが、悪い木は悪い実を結びます。¹⁸良い木が悪い実をならせることはできないし、また、悪い木が良い実をならせることもできません。¹⁹良い実を結ばない木は、みな切り倒されて、火に投げ込まれます。²⁰ こういうわけで、あなたがたは、実によって彼らを見分けることがで

きるのです。』見分ける方法は、実です。英語ではフルーツです。実を、フルーツをチェックしてみてください。

では、その実とは一体何なのか。あまりにも抽象的すぎると。でも聖書にはハッキリその実とはどんなものか書いてあります。**ガラテヤ 5:22**。開くまでもない有名なところですが。ここには**御霊の実**について書かれています。その**御霊の実**とは『**愛、喜び、平安、寛容、親切、善意、誠実、柔和、自制**』です。この**御霊の実**というのは、原文では単数形です。沢山の実がここに集まっているわけではありません。ぶどうの実のようなイメージを持つかもしれませんが、ここでは単数形のひとつの実のことを指しています。**御霊の実**、これは単数形でひとつの**愛の実**というふうに考えて頂きたいと思います。その**愛の実**の中に、「**喜び、平安、寛容、親切、善意、誠実、柔和、自制**」といった**愛の側面”aspect”**がここに描かれているわけです。実によって見分けなさい。そこには**御霊の愛**があるだろうか。「**喜び、平安**」あるだろうか。「**寛容、親切、善意、誠実、柔和、自制”self control”**」そうしたものがあろうか。その権威を持つ指導者には、**御霊の実**が結ばれているだろうか。

またヨハネの福音書 **13:35** には『もしあなたがたの互いの間に**愛**があるなら、それによって、あなたがたがわたしの弟子であることを、すべての人が認めるのです。』**愛**があるなら、キリストの弟子であるということを全ての人が認める、とあります。**愛**がなければ、キリストの弟子とは言えません。クリスチャンとは言えません。互いの間のしるし、サイン。それが**愛**という実であります。

また**愛**と聞けば、一番有名な箇所が新約聖書にありまして、**第一コリント 13章**。キリスト教式の結婚式で必ずと言っていいほど朗読される箇所です。**愛**の定義について書いてあります。『¹たとい、私が人の異言や、御使いの異言で話しても、**愛**がないなら、やかましいどらや、うるさいシンバルと同じです。²また、たとい私が預言の賜物を持っており、またあらゆる奥義とあらゆる知識とに通じ、また、山を動かすほどの完全な信仰を持っていても、**愛**がないなら、何の値うちもありません。³また、たとい私が持っている物の全部を貧しい人たちに分け与え、また私のからだを焼かれるために渡しても、**愛**がなければ、何の役にも立ちません。』**愛**がなければ値打ちがない。**愛**がなければ役立たない。まさにこの**愛**というものが神の権威を持つ者のしるし。神の働き、神のミニストリーのしるしは、また教会のリーダーシップの指導者たちのしるしは、この**愛**です。ギリシャ語では「**アガペー**」という**愛**であります。「**アガペー**」というのは、相手の最善のためには自分自身を犠牲にしても良いという**愛**であります。その教会は、そのミニストリーは、その牧師は、その宣教師は、この**アガペー**の**愛の実**を結んでいるだろうか。実によって見分けます。その一方で、その指導者は、その権威を振りかざして、まるで杖で頭を叩くような、尻を叩くような、背中を殴るような、そんな権威の使い方をしているだろうか。

アロンの杖は確かに実を結んでおりました。神様に対する**愛**、隣人に対する**愛**、それに満ちているもの。それが、神の与えてくださる杖であります。それが真の権威であります。「本当に私はこの人から聖書の教えを受けるべきだろうか。本当に私はこの教会に属すべきだろうか。」その基準は、その測り竿はこの神の杖です。アロンに与えられた杖のことです。そこには実があるでしょうか。**愛**がないならば、私はそのような教会や、そのような指導者の存在、その指導者の教えには全く興味がありません。いくら神学に精通していても、いくら聖書のエキスパートでも、どんな良い行いをする教会、どんな素晴らしい社会的な貢献をする教会でも、**愛**がないならば私は何の関心もありません。どんな素晴らしいメッセージをしようとも、そこに**愛**がないならば、そこには神の権威はありません。ですから、その鍵は「**愛の実**を結ぶ杖がそこに与えられているだろうか。その人に与えられているだろうか。」ということです。

人については皆さんもここである程度は納得できたと思いますが。その権威を与えられている牧師や、また宣教師や教会の目に見える指導者たちには、神の杖が与えられていますが、その見分け方は、その実のある杖が、そこに実があるかどうかで見分けるということ。この点については皆さんもある程度納得し

たかと思いますが、ただ「私はいろいろな本を読んでいます。いろんなテープを聴いています。いろんなセミナーに行きます。また、いろんなクリスチャンたちと交わりをし、会話をし、そこで色々な分かち合いもあります。でもそれらが全て本当に神様から出たものかどうか、どうやって見分けたいのでしょうか。この本に書かれていること、この CD やテープで聴くメッセージは、本当に聖書的なものかどうか。これが神から来ているものかどうか知りたいんです。あの人の言うことは本当に神からのものか。」その答えも、その鍵も、やはり実であります。実で見分けるということです。

聖書の中に、芽とつぼみと花と実が（これはアーモンドの花のことではありますが）、全部セットで出てくる箇所が民数記 17 章以外にもう 1 カ所あります。それは出エジプト記 25 : 33 です。『一方の枝に、アーモンドの花の形をした節と花卉のある三つのがくを、また、他方の枝にも、アーモンドの花の形をした節と花卉のある三つのがくをつける。燭台から出る六つの枝をみな、そのようにする。』その前後も是非読んで頂ければと思いますが、何のことを言っているかといいますと幕屋の中の聖所に置かれる唯一の光源であるランプスタンドの作りの指示の内容です。それは金で出来ていたもので、7つの枝に分かれている金の燭台、ランプスタンドでありました。そのランプスタンドには装飾が施されていて、そこにアーモンドの芽とかつぼみとか花、実が彫刻されていくわけです。打ち叩かれて作り上げられていくわけですがけれども、この7枝の燭台と呼ばれるものは、聖所の中の唯一の光であります。

詩篇 119 : 105 には『あなたのみことばは、私の足のともしび、私の道の光です。』という言葉があります。御言葉は光として描かれています。有名な言葉です。ここで言われている光の象徴は、御言葉であります。ですからその教えが本当に神からのものかどうか見分けるためには、光を照らし合わせる必要があります。その光というのは、御言葉です。その本に書かれていることは、聖書にも書かれていることだろうか。その人の教えは、テープにせよ、セミナーにせよ、人から聞いた話にせよ、本当に神の言葉にマッチアップしているかどうか。聖書の言葉と整合性が取れているかどうか。それとも不整合なのか。そのことによって、御言葉によって、聖書の言葉によって判別することが出来ます。それが、人の教えを实によって判別するという方法であります。

またイザヤ 8 : 19~20 にはこう書いてあります。『¹⁹人々があなたがたに、「霊媒や、さえずり、ささやく口寄せに尋ねよ。」と言うとき（スピリチュアルカウンセラーに聞いてみよとか、風水に聞いてみよとか、そういう現代に流行ってるものです。占いに聞いてみなさいと。）、民は自分の神に尋ねなければならない。生きている者のために、死人に伺いを立てなければならないのか。²⁰おしえとあかしに尋ねなければならない。（この教えとあかしというのが聖書の言葉のことを指しています。教えとあかし、すなわち聖書の言葉に尋ねなければならない。）もし、このことばに従って語らなければ（聖書に沿って教えなければ、聖書的なメッセージをしなければ）、その人には夜明けがない。（文字通り「光がない」という言葉です。）』御言葉に沿ったメッセージをしなければ、そのような教えをしなければ、そこには光がありません。神聖なものではありません。それは偽物だということです。「私にはこういう啓示が与えられました。このような個人預言が与えられました。」それは聖書の御言葉の光に照らし合わせるとどうでしょうか。「あの人は神に油注がれた器なんです。あの人は世界で用いられています。あの人の教会には大勢の人が集まっています。」実際に多くの人が癒されましたとか、問題が解決しましたとか言うかもしれませんが、それが証拠ではありません。見分け方は実によって見分ける。御言葉によってです。それ以外の方法で騙されてはいけません。

また使徒の働き 17 : 11。ここは礼拝においても、バイブル・スタディにおいても、毎回そこに集う人たちには心に留めておいて頂きたい、これを座右の銘にして頂きたいという重要な聖句です。『このユダヤ人は、テサロニケにいる者たちよりも良い人たちで、非常に熱心にみことばを聞き（今皆さんも 1 時間以上御言葉を熱心に聞いておりますが）、はたしてそのとおりかどうかと毎日聖書を調べた。』非常に熱心に

御言葉を聞く人たちは良い人たちだと、素晴らしいクリスチャンだと思うかもしれませんが、それだけでは不十分です。「はたしてそのとおりかどうかと毎日聖書を調べた。」その人たちが良い人たちです。ですから皆さんがここで長々と椅子に座って御言葉のメッセージを聞いても、それを自分で聖書を開いて本当かどうか、本当に聖書に書かれているかどうか吟味しなければ、ただ鵜呑みにしているだけでは、ただ右から左では全くと言っていいほど、皆さんは良い人たちではなくむしろ悪い人たちだと言っています。悪人呼ばわりするわけではないですけれども、ただここに座って長くメッセージを聞いていれば自分は立派なクリスチャンだと思わないで下さい。これを家に帰ってしっかりと聖書を開いて確認する、吟味する。その人を神様は良い人だと認めて下さいます。ですから私の言うことも全て鵜呑みにしないで下さい。皆さんの中に熱心にノートを取っている方がいます。それは当たり前だと思います。ノートを取らなければ多分吟味出来ないと思います。テープがあるから、CDがあるから後で聴くことも出来ますから、その分は勿論そこに頼って頂いてもいいですけれども、すぐに家に帰って聞きたいということであれば、やはりノートを取ると。ですからこれは強制ではありませんけれども、当然のことです。すぐに調べるということを前提にノートを取っているわけです。ただ残念ながらノートを取ってそれに満足して、「たくさん今日はノートを取れました。」と。全然家に帰ってもそれを振り返ることもなく、自分のノートを見ても全然よく分からないという人もいます。それも困りますけれども。吟味するということが目標で、目的であって欲しいと思います。ですからそこでちゃんとチェックをする、吟味をすると。

また**第一ヨハネ 4:1**を開いて頂きたいと思います。『愛する者たち。霊だからといって、みな信じてはいけません。それらの霊が神からのものかどうかを、ためしなさい。なぜなら、にせ預言者がたくさん世に出て来たからです。』飛ばして**6節**『私たちは神から出た者です。神を知っている者は、私たちの言うことに耳を傾け、神から出ていない者は、私たちの言うことに耳を貸しません。私たちはこれで真理の霊と偽りの霊とを見分けます。』「これで見分ける。」と言っている“これ”では、文脈上「私たちの言うこと」です。「私たちの言うこと」というのは、ヨハネの手紙を書いたヨハネたち使徒が言うことです。そのヨハネたち使徒が言ったことが、聖書になったわけです。すなわち聖書の御言葉を持って心理の霊か偽りの霊か、それを見分けなさいと言っているわけです。御言葉を持って見分けることもせず、「これは素晴らしい聖霊の働きです。」と言って信じてはいけません。「癒しが起こっています。奇跡が起こっています。」それだけで信じてはいけません。必ず聖書で吟味すると。これが正しい見分け方です。

でも、御言葉を利用して、聖書の言葉を使って、濫用して、悪用して、自分たちの教えていることを権威付ける人たちもいるということを皆さんは知っていると思います。彼らはそれを意図的にも使いますし、無意識にも使います。多くの場合は文脈から外して、自分に都合の良い教えを権威付けるために聖書の言葉を使う。そういう人たちもいますから、「あの人たちは確かに聖書の言葉を使っています。聖書主義ですと公言しています。」と。でも必ずあなたがそれを確かめて下さい。いくらその人が聖書の言葉を引用したり、利用していても、それだけで「あっ、ここは安心です。聖書の言葉が口に出されているから。指導者が聖書の言葉をもって語っているから。」と、そのように鵜呑みにしてはいけません。

ヤコブ 3:14~16に聖書の言葉を使っても、必ずしもその語る者が、その指導者が、神の権威を持っているとは限らないということを見分けることの出来る箇所があります。これも実によって見分けるという。『¹⁴しかし、もしあなたがたの心の中に、苦いねたみと敵対心があるならば、誇ってはいけません。真理に逆らって偽ることになります。¹⁵そのような知恵は、上から来たものではなく（上というのは、神からです。）、地に属し、肉に属し、悪霊に属するものです。（悪霊的だと、肉的だと言っています。）¹⁶ねたみや敵対心のあるところには、秩序の乱れや、あらゆる邪悪な行ないがあるからです。¹⁷しかし、上からの知恵は、第一に純真であり（ピュアであって）、次に平和、寛容、温順であり、また、あわれみと良い実とに満ち（良い実という言葉があります。）、えこひいきがなく、見せかけのないものです。（偽善的では

ないと言っています。) ¹⁸ **義の実を結ばせる種は、平和をつくる人によって平和のうちに蒔かれます。』**「確かにこの人は聖書の言葉を使って、引用して、そしてまるで権威のある神の器のように思います。」と。でも、御言葉を使っても注意しなくてはなりません。ここには、もしそこにねたみ、敵対心、秩序の乱れ、邪悪な行いがあるならば、それは健全ではありません。それは正しい聖書的なものとは言えません。そして、この中に義の実(これは正しい実ということです)、特にこれは神様との正しい関係がもたらす実というのは、平安・平和です。神様との関係が正しくないと、心は乱れます。そこにはねたみだとか、秩序の乱れも生じます。ですから、神様との正しい関係が実となって現れるのが、平和・平安といったものです。その人が御言葉を使って語る時に、あなたの心には平安があるでしょうか。いくら御言葉を引用しても、あなたの心の中にもし、あなたの魂のうちにこの平安・平和が経験されていないならば、それを味わっていないならば、それを感じていないならば。むしろ「私の心の中には不安がいっぱいです。何かおかしい。変だ。でもこの人は神学校も卒業している。でもこの人は牧師の免許を持っている。でもこの人は世界中で権威者として認められている有名な人です。」と。でもあなたの心には平安がありません。その時にこれをもって見分けて下さい。いくら御言葉を使ってもそこに、ここに現れている**純真、平和・平安、寛容、温順、あわれみと良い実に満ちていないならば。えこひいきがなく、見せかけ、偽善がない。**そういったものを私たちは、いくら御言葉を使っているとは言え、この実によって判断することが出来ます。繰り返しますけれども、神が与えてくださる権威、その杖というものには、必ず実が生じるものであります。そこには、アガペーの愛が現されているはずで、アガペーの愛が実を結んでいるはずで、また、御言葉の光に照らし合わせて、御言葉とマッチアップする。整合性があります。また、この義の実という平安がそこには常に満ちています。これによって私たちは見分けることが出来ます。

「人に与えられた権威、また教えについては、判別基準というものが良く分かりました。でも、教会についてはどうでしょうか。私は今教会を探しています。教会に繋がりたいと思っていますが、どこに繋がったら良いでしょうか。どこの教会に所属したらいいでしょうか。どの教会に行けばいいでしょうか。」この答えも、この鍵もやはり実によって見分けるという事です。**マルコ 11：12～14**をお読みします。『¹²翌日、彼らがベタニヤを出たとき、イエスは空腹を覚えられた。¹³葉の茂ったいちじくの木が遠くに見えたので、それに何かありはしないかと見に行かれたが、そこに来ると、葉のほかは何もないのに気づかれた。いちじくのなる季節ではなかったからである。¹⁴イエスは、その木に向かって言われた。「今後、いつまでも、だれもおまえの実を食べることのないように。」弟子たちはこれを聞いていた。』「空腹で、そこに実がなかったのでイエスは苛立って、ムカついて、いちじくの木を呪いました。」というのは嘘ですけども、そうやって皆さん見分けて下さい。そういう事はイエスは言われません。ただ、ここで**20節**を見て下さい。

『²⁰朝早く、通りがかりに見ると、いちじくの木が根まで枯れていた。』ものすごい奇跡が起こっています。これは、「いちじくの木を呪い」の有名な箇所なんです、深い意味があります。ただここでは今私たちが見ている内容と照らし合わせながら捉えていきたいと思えます。イエスは空腹でした。すなわちイエスは満たされたいと願っていたわけです。満たされたいと、満足したいと願っていたわけです。その時にこの通りがかりに目についたいちじくの木が象徴として使われています。中東のいちじくの木は、葉が繁る頃には最初の実が出来ます。小さな青い実です。でも、その実でも充分空腹を満たすだけの食べ応えのあるもので、決して甘くてジューシーではありませんが、空腹を満たすことは出来ます。ですから本来であれば、葉が繁っている段階で青い実ができていなければいけなかったんですが、ところがこのいちじくにはその実がありませんでした。大体3ヶ月もすれば完熟していくんですけども、しかしあるはずの実がそこになかった。イエスはそのいちじくの木を呪われました。空腹で、ムカついて呪ったわけではありません。私たちに霊的な真理を教えようとされて、敢えてこのことをされました。イエスがここで私たちに言わんとしていることは、「私を満足させて欲しい。私が今空腹である。私を満たしなさい。喜ばせなさい。」

と、そのようにイエスはここで私たちにも問いかけておられます。もし、イエス・キリストを満足させることが出来ないならば、私たちは他の誰をも満足させる事は出来ません。イエスはここで「私はお腹が空いている、空腹である。」と、実を欲しておられるわけです。フルーツが食べたい。ヘブル 13 : 15 にこういう言葉があります。イエスが欲している実について書かれています。『ですから、私たちはキリストを通して、賛美のいけにえ、すなわち御名をたたえるくちびるの果実を、神に絶えずささげようではありませんか。』本来そこにあるべき実とは、イエス・キリストを賛美する、ほめたたえる。イエス・キリストを一番喜ばせるのは、この賛美の、感謝の実であります。これこそが教会の存在意義です。多くの人たちは、教会は私のニーズを満たしてくれるところ。困っている人を助けるところ。または伝道活動の拠点であるとか、または夫婦関係を良くするための場所である。親子関係を回復させるための場所であるとか。色々なニーズにこたえてくれる、そういう場所だと思い違いをしている人たちがいます。でもそのような夫婦関係を良くするセミナーだとか、鬱の人を癒すセミナーだとか、習慣的な悪習慣を、その罪を、依存症を克服するためのいろいろなセミナーとか、そういうことを私は全て悪くて否定しているではありません。ただそれらは教会の存在意義からしますと、第二義的なものでしかない。第一義的なものは何かと言いますと、イエス・キリストを満足させることです。イエス・キリストの空腹を満たすことです。イエスが欲するものを私たちは与えることが出来るんです。それがイエスをほめたたえること。イエスを喜ばせること。イエスに栄光を帰すということです。人間を喜ばせることが、教会の存在意義ではありません。人間の必要を満たすことが、教会の本来の有り方ではないんです。ですから、そのような人のニーズに応えるようなカウンセリングだとか、セミナーだとか、それらが第一義的な意味だと考え違いしている教会でイエスは空腹を覚えておられます。そのような教会は、いちじくの木のような、最終的には枯れてしまうかもしれません。

この世のものはすべてイエス・キリストによって造られ、イエス・キリストのために存在しているということは、コロサイ 1 : 16 にも明言されております。『なぜなら、万物は御子にあって造られたからです。天にあるもの、地にあるもの、見えるもの、また見えないもの、王座も主権も支配も権威も、すべて御子によって造られたのです。万物は、御子によって造られ、御子のために造られたのです。』教会も勿論そこに含まれております。教会はイエス・キリストによって造られ、教会はイエス・キリストのために存在しています。それ以外の存在目的は教会には、すべてのものに対しても同じですが、与えられておりません。

また黙示録 4 : 11 にも、すべてのものが造られた目的というのは、“神の御心のゆえに”とありますが、これは“神の喜びのゆえに”すべてのものは存在しているんだと。すべてのものはキリストのために、すべてのものは神の御心のゆえに、または神の喜びのゆえに存在しているんです。それが教会の存在意義でもあります。

ですからこの MGF は、イエス・キリストに喜ばれている教会だろうか。「今日のメッセージは良かった。長かった。疲れた。」とか、色々反応があると思うんですけども、それ以上に私たちが関心を向けなければいけないのは、イエス・キリストはこの教会に来たいだろうか。イエス・キリストは喜んで私たちと一緒にこの教会でご飯を食べたいだろうか。黙示録の 3 : 20 に、イエス・キリストは教会の外に閉め出されているという残念な姿が、悲劇がそこに描かれています。『見よ。わたしは、戸の外に立ってたたく。』と。イエスが教会の外に、ラオデキヤという教会の扉の外に立たされていて、ノックしているんです。扉を叩いているんです。ありえないことです。そして「私は中に入りたい。そして私たちと一緒に食事をしたいたんだ。」と書いてあります。ですから、そのようにイエス・キリストは私たちのことを、私たちの教会のことを、欲しております。「私たちと一緒にご飯を食べたい。私は空腹である。私を満足させて欲しい。私を喜ばせて欲しい。満たして欲しい。」と。

教会探しをする時の大事なポイントは、その鍵は、その教会がイエス・キリストに喜ばれている教会

だろうか。それとも葉っぱが繁っていて全く実がない。すなわち、沢山のアクティビティーはある。沢山のいろいろな奉仕活動はしている。いろいろなセミナーはある。いろいろなコンサートがあったり、ワークショップがあったり、スモールグループがあったり、いろいろな集会がある。でも、そこに実があるだろうか。イエス・キリストが喜ばれるようなものがそこに見られるだろうか。そこに賛美があり、御言葉の学びがあり、礼拝・ワーシップがあって本当にそこはイエス・キリストに喜ばれている教会だろうかということです。是非そのように皆さんは実を見分ける、その果物を、フルーツを見分ける検査官・検査係となって頂きたいと思います。勿論そのような検査をするということは、これは教会非難をすることとは全く別物です。『さばいてはいけません。さばかれないためです。』とマタイ7:1に書いてあります。でも、そのさばいてはいけないというのは、何事においてもさばいてはいけないという意味ではありません。教会においては、また牧師や教会のリーダー、その教え、についてはしっかりとさばかなくてははいけません。それは断罪という意味で、罪に定めるという意味ではなく、それが神聖なものかどうか霊を見分けなさいと言われていきますから、それを私たちは吟味する、審査する、評価する。ただ粗探しをして、非難するのではなく、それが果たして本当かどうか、聖書的かどうか、神からの権威が与えられているかどうか、実を検査する。これはさばくこととは別物であります。今日は大分長くなりましたけれども、最後に皆さんにチャレンジしたい事は、今までお話しした事は牧師だとか教会だとか、また聖書の教えといった内容ですけれども、皆さんは父親として母親として神様から権威が与えられております。またクリスチャンとしても権威が与えられております。福音を語るという権威も与えられていますから、他人事として今までの話を捉えないで頂きたいと思います。あなたの子供や孫に霊的なインパクトを与えたい。「私の10代の反逆児に私の権威をしっかりと認めてもらうように働きかけたい。」そのように自分の子供や孫に素晴らしい霊的なインパクトを与えたい。神の与えられた権威を見てもらいたいと願うならば、今お話ししたようなその杖を持って接して頂きたいと思います。杖で彼らを打ち叩いて力づくで従わせるものではありません。そうではなくて、愛の実はどこにあるだろうか。神様を愛し、人を愛し、本当にそこに見せかけではない、死んだ木ではなくて、そこに花が咲いている、つぼみができている、実ができている。そのように皆さんは見せることによって、模範を示すことによって、インパクトを与えることの出来る、権威のあるメッセージをその反逆児に、その神様から離れてしまった子供たちに、またはまだイエス・キリストを受け入れていない家族に伝えることが出来ます。そして職場においてもそうです。学校でもどこでもいいですけども、もし本当にイエス・キリストのことを知ってほしいならば、福音をしっかりと心に受け止めてほしいと願うならば、やはりあなたの与えられている権威というものをしっかりと認識して、このことを適用して頂きたいと思います。そのあなたの教えること、語ることは、聖書的かどうか。また、平安という実を結んでいるかどうか。いろいろな見分け方が出来るはずですよ。そしてあなたの今住んでいる家、住まい、ボロ屋でも、小屋でも、テントでもいいですけども、あなたのその住まいには、(教会の話ばかりをしているではありません。)イエス・キリストは住んでいるでしょうか。あなたの家にイエス様は「喜んで立ち寄りたい。一緒にご飯を食べたい。」あなたの家はそういう家でしょうか。教会だけに限定しないで頂きたいと思います。主はそこにおられるでしょうか。あなたの聴いている普段の音楽、あなたのステレオから流れている音楽は、賛美の生贄でしょうか。あなたの見ているテレビは、イエス・キリストをほめたたえるような番組でしょうか。そうでないならば、そこでインパクトのある証しをしようとは期待しないで頂きたいと思います。そこにイエス・キリストが豊かに臨在されているということは期待出来ないと思います。ですから、是非これをチャレンジとして皆さんの家庭において、ベッセルームにおける夫婦の会話はどうでしょうか。いつも不平不満ばかりで、文句ばかりであれば、そこには賛美の唇の果実が見られないならば、そこにはイエス・キリストの臨在を期待出来ません。ですからこのようにイエス・キリストが空腹である、お腹が空いている、ハングリーだということを意識して頂いて、そしてあなたの家でイエス様

が喜んで食事をしたい、そのようにイエス・キリストを喜ばせる事を意識する家庭は、必ずその雰囲気は変わります。今までの家庭とは違うということが必ずあなたのノンクリスチャンの夫にも、妻にも、子供たちにも伝わります。ですから是非この権威を自称する人たちをどうやって見分けるのか。その教会をどうやって見分けるのか。判断基準というものを是非この聖書から皆さん教えられてきましたので、ただの牧師批判、ただの教会批判ではなくて、聖書によって吟味する。鵜呑みにしない。そして私たちも繋がるべき教会が必ずありますから、そういう吟味する、検査する作業を怠って、ないがしろにして、面倒くさがって、嫌がって「私はフリーです。どこの教会にも行きません。」自己満足ですと。イエス・キリストは喜んでおられません。そのことを是非私たちも自戒として、今日ここに集まっている人は、イエス様が喜んでおられる。それは間違いないと思いますけども、教会においての話かもしません。家ではどうでしょうか。そのことも考えて頂きたいと思います。